

2011 IARU GSP 参加報告書

Peking University: Chinese Politics and Public Policy
4-29 July, 2011

私は、7月の4週間、北京大学にて Chinese Politics and Public Policy と初級中国語のクラスを受講してきました。私が派遣された北京大学ではサマースクールとして、IARUだけでなく他大学のグループまたは個人も参加し、総勢100名を超す学生が世界中から集まっていました。

私にとって初めての海外留学であり、何もかもが新鮮で刺激的な毎日を送ることができました。特にその中で、IARUのメンバーをはじめとする、多くの優秀な海外の学生との交流が私にとっては一番の財産になったと思います。

私が今回、IARUのプログラムに参加を希望したきっかけですが、一つは昨年夏に参加した国際学会にあります。英語での論文執筆、プレゼンテーションの準備等、苦勞もありましたが、大きな達成感が得られ、また、海外の学生、研究者と接する初めての機会にとっても刺激を受けました。もっと自由に世界の人々と自分の研究分野について語り合いたい、そして、交流を通じて自分の世界を広げたいと思うようになり、海外に対する興味が強くなりました。

その後、私の所属する研究室に中国からの留学生が加わり、チューター役を引き受け、交流を深める中で、中国に興味を抱くようになりました。丁度同じころ、尖閣諸島問題が大きく報道され、国内では日中関係が大きな話題となっており、世界的にもその経済成長、エネルギー資源、環境問題等、大きな注目を浴びています。そうした中、IARUの北京大学のプログラムは中国をより深く知ることができる絶好の機会であると思い、派遣を希望しました。

4週間の派遣を終え、授業を通じて中国に関する多くの知識を得ることができました。王朝時代とその衰退、列強の進出、儒教、多民族といった様々な要因が政治に反映してきた過去を学び、現在、そして今後の中国について考える力がついたと思います。しかしながら、この4週間で得たものはそれだけではありません。授業だけでなく多くの時間を共有したIARUのメンバーとの交流からも様々なことを学び、感じ、刺激を受けました。

今回、北京大学に派遣された IARU のメンバー構成は、東京大学 2 人、ANU 4 人、NUS 1 人、ETHZ 1 人、UC バークレー 3 人、オックスフォード 3 人、以上の 14 名でした。様々な国籍の人々の集まりであり、個性も様々でしたが、皆共通して高い学習意欲を持ち、自分の考えをしっかりとっており、素晴らしいメンバーと共に時間を過ごすことができました。

派遣前、私は正直、自分の英語力に不安がありました。ネイティブスピーカーとうまくコミュニケーションがとれるのか、授業についていけるのかと。実際、その不安は当たっていました。ネイティブ同士の会話はほとんど聞き取れませんし、一対一で話をして、意味がわからないことがしばしばありました。しかし、その一方、伝えたい意思があれば、絶対伝わるという自信も得ました。文法の正しさや流暢さには自信は全くありませんが、伝えたい具体的な何かがあれば、自然と言葉になるのだなど。

私は、大学 4 年間、英語に触れる機会はほとんどなく、前述の国際学会を機に英語の勉強を進んでするようになりました。そう長くはない勉強期間であり、目標とするレベルにはまだまだ遠いですが、今回の初めての留学では、これまでの勉強で得た能力は存分に発揮できたと思います。同時に、今までの勉強では出会わなかったスラングやシンガポール人の独特な訛り（彼らはシンガポール人の英語を“Singlish”と呼び、その特徴をいくつか教わりました）などを体験することができ、自分の英語力の成長も感じることができました。そして、更なるレベルアップが必要だと、強い向上心を得ることができました。

もう一つ、海外のメンバーとの会話を通して感じたことは、あたりまえのことですが、語学力だけでは会話はできず、話題に関する知識や思考がより重要であるということです。当然、自国の文化に関する話題が多く会話に挙がりましたが、自国のことについて知らなければ、なかなか会話になりません。私が驚いたのは、日本のコミックやアニメが海外で有名であり、その話題をよく振られたことです。私自身はあまり興味がなく、彼らの方が詳しかったため、逆に教わってしまいました。また、メンバーの多くは、国際関係、法、経済といった人文・社会科学系の学生であり、学問に対する共通の議論はできませんでした。こちらからいろいろ聞き出して、何か意見が言えるくらい、他の学問に関する知識も広く持つことは、こうした国際交流においてとても役に立つだろうと思いました。

将来、弁護士として環境保護に携わりたいという法学部の学生との会話は、興味深かったです。私は卒業後、グローバルに事業を展開するエネルギー企業で働く予定ですが、その弁護士を志す学生はその企業のことを、地球資源を搾取し、環境を破壊する“evil company”だと言いました。実際、人々の生活の豊かさと地球環境保護の両立は難しく、かつ重要な問題であります。将来、私達がこうした難題に対し、世界中の人々、様々なバックグラウンドを持った人々と協力して、立ち向かわなければいけないのだなど感じました。

北京大学での授業に話を移します。Chinese Politics and Public Policy のクラスは、週に 3 日、計 8 時間ありました。授業の形式は、スライドにまとめられた要点を中心に教授が講

義を行うというものでした。一日における講義の時間そのものは、中国語のクラス（週 6 時間）を含めても多くはなく、時間にゆとりがあるように感じます。しかし、教授が読むように勧める文献の量は膨大で、とても全てを読み切ることは不可能でした。私は文献をいくつかに絞り、時間のある限り机に向かって読み進めました。社会科学に関する文献を真剣に読むのは初めてで、知らない単語もたくさんありました。一つ一つ意味を調べながら、とても時間はかかりましたが、徐々に慣れていき、どんな量の文献でも、もう驚くことはないという自信を得ることができました。プリントアウトして製本したいくつかの文献と、その文献を読み進める中で作成した単語リストは、いい記念となっています。

成績は最終日の試験で決まります。試験内容は 7 つの質問から 3 つ選び、それについて小論文を書くというものでした。私は、試験で何かしっかり答えることができるのだろうか、授業が始まってからも、ずっと不安に感じていました。それでも、幼稚な文章だったとは思いますが、自分のベストを尽くして、解答用紙を埋めることができ、達成感を得ることができました。

中国語のクラスはレベル別に 6 つに分けられ、私は初級のレベル 2 のクラスを受講しました。私は大学の初年度の 1 年間、第二外国語として中国語を勉強していました。内容はほとんど忘れてしまっていたのですが、授業を受ける中で思い出すこともあり、自分のレベルに合ったクラスを受講できたと思っています。授業の内容はクラスによって様々だったようですが、私のクラスではスピーキングが中心でした。学生 12 名のクラスでしたが、テキストの会話文に沿ったロールプレイングや簡単な発表等を行いクラスメートと楽しく授業を受けることができました。テキストのシチュエーションも交通機関、レストラン、観光などと、まさにタイムリーな内容であり、学んだフレーズを実際に北京の街で試すことができ、効果的に習得することができました。

次は北京での生活についてです。最初に北京大学で驚いたことはその広さと食堂や売店などの充実ぶりです。私達の宿舎もキャンパスのすぐ隣でしたが、一般の学生の寮がキャンパス内にあり、生活環境が整っている感じを受けました。食堂は 10 か所程あり、テーブルなどの汚さにやや驚きましたが、そのメニューの豊富さ、値段の安さ、おいしさに魅了されました。

北京市内のバスやタクシーなどの交通機関の安さにも驚きました。地下鉄も安くて便利で、週末の観光などで一番利用しました。ただ、人や車の数はものすごく多いと感じました。また大通りの交差点を渡るのは怖かったです。歩行者は信号を無視し、車も歩行者優先という考えは無いようです。

観光に関して、サマースクールプログラムに含まれているものでは、天安門広場、万里の長城、国立博物館、それから京劇を見に行きました。他にも学生同士で天壇、頤和園、雍和宮などの史跡、寺院も見て回りました。万里の長城ではその壮大さに感動しましたが、やはり、史跡等は特に、歴史的な背景を学んでから行った方が、より楽しめるだろうと思

います。

また、IARUのメンバーのために北京大学の学生が中国の伝統楽器と伝統舞踊の紹介をしてくれたりもしました。本当に様々な方面から中国の文化を学び、経験することができました。東京に戻ってすぐ、私の所属する研究室の中国人留学生に会ったとき、北京の話で盛り上がることができ嬉しかったです。

私はあと約半年で大学院を卒業する予定ですので、今回の派遣が、学生として最初で最後の留学になると思います。北京大学で出会ったIARUのメンバーの多くは学部生であり、彼らは今後も積極的に海外に出て学んでいくのだらうと思います。既に今後の留学が決まっている学生も複数いました。私も彼らから刺激を受けましたし、もし機会があるのなら社会に出てからでも、積極的に海外に出て国際理解を深めていきたいと思います。そして将来、グローバルな課題の解決にすこしでも貢献していきたいと考えています。

今回の派遣は間違いなく、私の視野をよりグローバルなものへと変化させ、私の人生に大きなインパクトを与える経験となりました。また、世界中に多くの友人を作ることができ、彼らと過ごした充実した4週間の思い出は一生の宝物です。

最後にこのような機会を与えてくださった東京大学国際交流課の方々と北京大学のプログラム担当者、TA、関係者の皆様、楽しい時間を共に過ごしてくれたIARUのメンバーに感謝申し上げます。

1. 授業概要

1-1. Chinese Politics and Public Policy

本授業の目的は19世紀末以降の中国の政治と公共政策の特色を歴史とも関連させつつ様々な観点から分析することである。講師は大変リベラルな思想を持っており、時には中国の政治体制にかなり批判的な視点から考察を加え、インターネット上では情報統制がなされている天安門事件ですら詳細に扱った事は大変興味深かった。

授業前半は清朝末期以降の中国政治や社会の特色を歴史的背景と関連させつつ説明していくという内容であった。清朝以前は自らが「帝国」であり領土拡大を繰り返していた中国が、19世紀以降は欧米列強の帝国主義の対象となりナショナリズムが拡大した。これが辛亥革命をもたらし、結果国民党が権力を握ったものの、抗日戦争における「国共合作」は事実上国民党勢力ばかりを疲弊させ、豊富な農村人口を抱える中国共産党の力が相対的に増大、1949年の中華人民共和国に至る。共産党は農民の支持を得るに当たって人民を動員し、数的優位によって地主階級から土地を接収した。このような全体行動を「運動」と呼び、現在に到るまで市民を積極的に政治に関与させるための手法として用いられている。「運動」は必ずしも暴力を伴わない点で他の社会主義国とは異なる中国独自の手法である。一旦は農民に土地を分配した共産党であったが、1950年代に入るとこうした土地を再び接収し人民公社を設立、「大躍進」を唱え全体主義の性格を強めていく。しかし集団化に寄る生産性の低下や政府による虚偽報告・内部チェックの欠如等の要因が重なって大飢饉が起これ大躍進は失敗、毛沢東は自己批判を強いられ劉少奇・鄧小平らが台頭する。彼らに並んで政治的主導者として台頭した林彪は毛沢東主義に回帰し、自らの立場に満足していなかった毛沢東自身の意向もあり毛沢東の神格化と文化大革命が進められていく。中国全土で凄惨な暴力を引き起こした文革はその後の中国政治に大きな影響を与え、その後の中国の指導者は如何に自らを文革と差別化するかという問題を常に考えることとなった。1980年代には鄧小平によって農村では個人経営が認められるようになり、中国の食料自給率は大幅に改善、農民の生活の質は大幅に向上した。しかし、文革を経て重工業に偏重していた都市部の体質は変

化せず、人民に不満が募っていった。それに加え鄧小平が文革と自身を差別化する一環として大学での言論やメディアに対する統制を一部緩和したことが、1989年の天安門事件の一因となったと言える。1990年代以降は経済的には改革開放を通して自由化が進められた一方で、政治的には天安門を教訓にして権威主義の性質を次第に強めて、現在の胡錦濤体制にまで至っている。実際、改革開放で有名な鄧小平の統治においても共産党による一党独裁が最優先とされていた。また、経済的な自由化は社会の不均衡をもたらし、80年代に見られるパレート改善的経済成長は見られなくなった。農村では近年の土地の強制接収や地方政府による税金の追加徴収などによって、都市部では劣悪な労働条件や高学歴層の低待遇などによって人民の間で不満が募っている上、慣習化している汚職や食品安全問題に対する対応など政府に対する批判が高まっており、次第に政府はこれらをコントロールしきれなくなってきた。

授業後半は授業前半を踏まえて、現代の中国政治における問題点を扱うというものであった。中国共産党は憲法では必ずしも一党独裁体制を認められているわけではないが、政府の組織構造と党の組織構造が大いに重複しているために事実上共産党と国家が一体となっている。特に、国家中央軍事委員会の構成員が全て共産党中央軍事委員会の構成員に一致していることが、国家と党の二重体制を可能にしていると言える。しかし、党内にも様々な派閥があり、派閥間での権力の状況が政策決定を制約する事も多いと考えられている。一人っ子政策の回では、当初は国家の中央が人民の意思に反して規制を決定した政策であったが、現在では政府の意図だけでなく、都市に移住した労働者の金銭的制約や教育にかかる費用など、政府・人民双方の利害が一致しているという側面があり、反対の声は少なくなっていることを学んだ。一方、少数民族自治においては現在の53に及ぶ少数民族の分類が都合主義的な方法に基づいて分類された事を学び、逆に少数民族の保護が手厚すぎるために実際に保護を必要とする漢族の人民に保護が行き渡らないことから不満を増しているとの事であった。

1-2.Chinese 6

本授業は開講されている中国語のクラスの中で最上級であり、授業スピードや内容も高度であった。文法面では細かな同音異義語の細かなニュアンスの違いに注意しながら自然な中国語を作文することに焦点が置かれた。会話面では各生徒が10分程度のスピーチを2回担当したほか、1時間を使った討論も行っ

た。私以外の生徒は全員が家庭や日常生活で中国語を使う環境で育っていたため、会話面ではまだまだ力不足を実感したが、積極的に発言をした結果1ヶ月のみではあったものの着実にレベルアップをすることが出来たと考えている。また、そのようなクラスに在籍できたことを誇りに思う。

2.見学・文化体験

本プログラムでは多くの中国の文化体験や見学の機会が提供された。天安門広場や故宮ではその大きさに圧倒され、人々が毛沢東記念館に数百メートルの列を作って並んでいる様に驚いた。茶館では伝統的な中国歌劇や漫談・武術のショーを見学し、北京大学の学生との交流では中国音楽を練習する機会もあった。きらびやかな装飾は一見日本人の目からは異質に映ったが、各所で日本は中国から多大な影響を受けていることを実感した。

3.留学・学習・国際理解に対する姿勢の変化

私は2011年5月まで交換留学制度によりシンガポール国立大学に1年間留学し、その後6月末までバングラデシュのNGOにてインターンを経験した。その為、私にとって7月の北京大学への留学は1年程の海外生活の最後を飾る1ヶ月であった。これらの経験を通して、私は自らの中にあつた海外で経験を積む事や国籍(出身)という概念に対する精神的な垣根が無くなったように思う。留学以前の私は「留学」という言葉に憧れ、留学をする事自体が一種の偉業であるかのような印象を抱いていた。また、外国の人と交流することはそれ自体が日本人と交流することとは異なる特別なものだと考えていた。

しかし、実際に留学をして、同様に各国から留学してきている多くの学生と交流する中で、いつしかそうした環境が自分にとっての「日常」へと変化した。特にIARUでは世界各地の大学からごく少人数の学生ずつが派遣されているため、「多数派」や「少数派」、「現地人」と「外国人」と言った概念が気にすることなく、一人ひとりが個人として交流することが自然に出来たように思う。(例えば、日本で日本人が外国人と交流すると、双方にとって「現地人」「外国人」という立場を完全に払拭することは難しいのではないだろうか)

中国は今や世界に多大な影響を与える大国である。ましてや、その隣国である日本にとって中国は経済・政治・文化と、どの側面をとっても切っては切れない関係にあると言えるだろう。私はアジアの国際政治における日本の役割に

興味があり、今回中国で学んだ中国の政治体制や意思決定プロセスについての知識は日本がどのような選択をすべきか考える上で大きな糧となると信じている。特に、シンガポールでは東南アジアの国際関係を勉強したこともあり、今後はこの1年で経験した2度の留学で得た知識を総括し、自分の国と向き合いたいと考えている。